

教育研究業績書

2016年10月01日

所属：食生活学科

資格：准教授

氏名：福田 也寸子

研究分野	研究内容のキーワード
臨床栄養	臨床栄養教育、臨床栄養指導
学位	最終学歴
修士（学術）	大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. マルチメディア機器を利用した授業方法等	2011年	教科書の他、コンピューター・ビデオ等の視聴覚教材の活用、知識の定着確認のための小問題の提案等、理解を深める取り組みを行っている
2 作成した教科書、教材		
1. はじめて学ぶ 健康・栄養系教科書シリーズ7 臨床栄養学概論 病態生理と臨床栄養管理を理解するために	2011年10月	臨床栄養学概論を1年次後期あるいは2年次前期で初めて学ぶ学生を対象に作成した。図表を多く用いて専門用語も懇切丁寧に平易な文章で記述するよう心がけた。臨床経験豊富な医師並びに管理栄養士による編著である。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 生活習慣病改善指導士	2014年02月から現在	本資格は肥満に関連する生活習慣病改善のための指導を行うにあたり専門的知識および技術を有する者に与えられる資格で、日本肥満学会が認定するものである
2. 管理栄養士	1976年11月から現在	本資格は傷病者に対する療養のための必要な栄養指導を行い、病院等において特定多数人に対して継続的に特別の配慮を必要とする給食管理及び患者の栄養管理を行うことを業とする者に与えられる医療系の国家資格である
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Nutrition Care 9巻4号 特集企画 ナゾ解き生化学おもしろ講座 イラストでわかるビタミンとミネラルのはたらき 「葉酸・ビタミンB12・ビタミンC」	共	2016年02月	(株) メディカ出版	監修：新古賀病院副院長 糖尿病センター長 川崎英二先生 管理栄養士1～3年目の読者対象、栄養管理・指導を行う際に必要な生化学の基礎知識、栄養素のはたらきとそのとりかたについて理解し、どのように臨床栄養管理にいかすのか、スキルを身につけてもらうことを目的に企画されたもの。『葉酸・ビタミンB12・ビタミンC』の部分を執筆。
2. イラストで生化学がススイわかる 栄養素のはたらきと栄養のとりかた 「3. たんぱく質」	共	2015年2月	(株) メディカ出版	監修：長崎みなとメディカルセンター市民病院 糖尿病・代謝内科診療部長・研究開発センター長 川崎英二先生 管理栄養士1～3年目の読者対象、栄養管理・指導を行う際に必要な生化学の基礎知識、栄養素のはたらきとそのとりかたについて理解し、どのように臨床栄養管理にいかすのか、スキルを身につけてもらうことを目的に企画されたもの。3「たんぱく質」の部分を執筆。
3. 栄養管理&栄養指導にいかす基準値と異常値で病態を見きわめる 検査値 読み解き力UPブック	共	2014年10月	(株) メディカ出版	監修：川崎英二（長崎大学病院）、主要な共著者：花田浩和（長崎大学病院） 管理栄養士1～3年目の読者対象、栄養管理・指導を行う際に必要な疾患の知識取得と、疾患ごとにどのような検査値に注目すればよいか、そしてそれらをいかに読み解き、どのように栄養アセスメント・モニタリングや指導にいかすのか、というスキルを身につけてもらうことを目的に企画されたもの。第4章「血液生化学検査『ALP、LDH、CK、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
4. 高齢者の糖尿病と栄養 合併する疾患ごとの栄養ケア	共	2014年06月01日	フジメディカル出版	AMY、LIP』の部分を大阪府立成人病センター臨床検査科主任部長と共に執筆。 監修：雨海照祥、葛谷雅文、中島弘 編集：福田也寸子 高齢糖尿病患者における栄養ケアについて、合併する疾患ごとに病態の特徴と栄養ケアを各領域の専門医と管理栄養士の立場から執筆されたものを編集した（執筆者40名）。総論「高齢糖尿病患者の合併症と栄養食事指導」、各論「痛風・高尿酸血症」、「痔疾患」の栄養ケアの実際について執筆した。
5. はじめて学ぶ健康・栄養系教科書 シリーズ7 臨床栄養学概論 病態生理と臨床栄養管理を理解するために	共	2011年10月	(株)化学同人	秋山栄一、位田忍、鞍田三貴、鈴木一永、高岸和子、福田也寸子、古澤通生、蓬田健太郎 臨床栄養学概論を1年次後期あるいは2年次前期で初めて学ぶ学生を対象に作成した。図表を多く用いて専門用語も懇切丁寧で平易な文章で記述するよう心がけた。臨床経験豊富な医師並びに管理栄養士らによる編著である。
6. お家ごはんは楽しく美味しく～糖尿病だからできる気づかい～	単	2011年04月	財団法人大阪成人病予防協会発行	大阪府立成人病センター糖尿病教室実践編で提供してきた創作糖尿病食のレシピ225編を編集した
7. ニュートリションケア 2010年秋季増刊 Nutrition Care 会話形式で学んで即実践「疾患別患者タイプ別 栄養指導レッスン」	共	2010年11月	メディカ出版株式会社	独立行政法人 国立病院機構 京都医療センター 臨床研究センター 予防医学研究室 室長 坂根直樹 編 疾患別・患者タイプ別の臨床栄養指導についての解説を編集したもの。第1章「これからの管理栄養士に求められる栄養指導ニュースタイル」、第2章「NGワード・OKワードでわかる患者タイプ別栄養指導レッスン」、第3章「会話形式でわかる疾患別栄養指導レッスン」、第4章「ポイント別でわかる栄養指導レッスン」で構成されており、第4章「ポイント別でわかる栄養指導レッスン」のうち、「高尿酸血症」について執筆した。
8. がんを治すチカラ	共	2009年09月	毎日新聞社	大阪府立成人病センター堀 正二総長他多数 2007年から毎日新聞に連載された「がん50話シリーズ」の計150話分の単行本用として改編されたもの。ドクターとコメディカル（看護師、薬剤師、臨床検査技師、管理栄養士、診療現場の技師など）が執筆。「化学療法中でも食べやすい食事」の項目を担当した。入院中の栄養支援として入院食に提供している「コンソープの寒天寄せ（NSTゼリー）」や、「鶏ささみ肉のムース仕立て（NSTムース）」についても紹介した。
9. がん患者の糖尿病治療	共	2005年05月	日本医療情報出版社 月刊がん「もっといい日」	中島 弘、福田也寸子 がん専門病院における糖尿病療養について概説。合併率の高い糖尿病の診療環境を病院横断的な機能として充実を図っている。「閉じた輪のシステム」の特徴は外来を中心として、がんのような生命予後に関わる基礎疾患を有する患者が自身の意思とペースでメディカル・コメディカル間を何度でも巡り、巡りながら療養の達成度・完成度を高めていき自分へのケアを進めるところにある。患者からみて輪が閉じた全人的な療養が巡らされている。
10. 第4・5・6回透析食・レシピコンテスト 教育部門 グランプリ受賞		2011～2013年度	バイエル薬品(株)主催 全国透析食レシピ・コンテスト 教育部門（管理栄養士・栄養士養成校へ通う学生が対象）審査委員は腎臓病専門医、全国腎友会会長大学教授、大学講師（管理栄養士）	研究室ゼミ生を対象に臨床栄養学課外実習の一環として透析食の考案を指導した。結果、2010年度の第3回では準グランプリ（グランプリ該当者なし）受賞、2011年度から2013年度は3年連続してグランプリを獲得した
2 学位論文				
1. 2型糖尿病患者における反復療養指導効果の検証と同効果に影響を与える食習慣因子の探索	単	2014年3月26日	大阪教育大学大学院教育学研究科（修士課程）	3年間の縦断的管理の中で定期的に反復栄養指導を実施し得た2型糖尿病患者15名と他の一般的経過を経た17名の比較を介して個別反復療養指導の短・長期効果を群内・間で検証し療養効果に影響を与える食習慣因子を探索。反復療養指導は短・長期において血糖・脂質・体重管理に有用。食習慣因子は夕食依存と嗜好品依存がともに大きい場合の方が夕食依存のみの場合より改善効果が表れ難いが、単一因子のみであってもそれが改善することで返って代償機転で気付かないうちに嗜好品依存が増す場合があるので食習慣全般に着目した栄養指導が必要
3 学術論文				
1. 食物アレルギー児をもつ母親自身における栄養素等の摂取状況とQOLに関する検討（査読付）	共	2015年05月	日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌, 13(1):19-27, 2015	福田也寸子、高木絢加、山本周美、中島理恵、西田京子、高岡有理、亀田 誠、土居 悟 食物アレルギー児をもつ母親自身の栄養素等摂取状況とQOLに関する検討を行ったところ、栄養素等摂取状況では食

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 臨床栄養学教育に患者の視点に立った倫理観育成をいかに組み込むかについての試み - 透析クリニックでの課外実習、透析食考案からレシピ・コンテスト受賞までの体験学習を通して - (査読付)	単	2015年03月	武庫川女子大学紀要 (自然科学編), 62, 1-8 (2014)	物アレルギー児をもつ母親55名 (FA群) と、食物アレルギー児をもたない母親47名 (N群) の間で差がなかったが、FA群内で三大原因食品を複合してもつ場合では、その母親のBody Mass Indexは低く、代替食の使用が多い等調理に手間をかけている母親ほどQOLが低かったことより、母親の心的負担を軽減させる除去食療法の支援の必要性が示唆された。 既存の臨床栄養学実習に不足している部分の補完として、ペイシエント・インサイトの観点を主眼とした実習を2011年度から2013年度の間に、食物栄養学科4回生14名 (2011年度3名、2012年度6名、2013年度5名) ゼミ生を対象に透析クリニック (大阪市) において実施した。患者との面談を介して考案した透析食について外部評価を受検したところ、3年連続最高賞を受賞した。学生のモチベーションはより高まり、将来へのイメージ育成にもつながった。 臨床栄養学の学習に患者の視点を取り入れた教育法は、学生の意識改革だけでなく、学生のモチベーションと将来へのイメージ育成を図り、医療者育成プログラムの試案として妥当性が証明されるものと考えられる。
3. コミュニティ再編に果たす食育の役割と意義 (査読付)	単	2012年03月	武庫川女子大紀要 (人文・社会科学), 60, 107-114 (2012)	食には心身両面の健康に寄与する役割がある。さらに食事を一緒にとることで、人とのつながりが生まれ共感的コミュニケーションから社会性の活性化が期待できる。食がもつ機能を、地域におけるコミュニティ再編の側方支援として活かし、暮らしの管理と地域社会への参加を連動させていけば、食育の意義が深まるうえに、コミュニティの再編にも役立つ。臨床において糖尿病療養教育にコミュニティ型の環境下を構築し療養指導を実践した結果、患者の療養成果は維持され、スタッフにおいては向学心や勉強心が向上するという効果を得た例があるので、コミュニティ再編に果たす食の役割と意義、食育の機能を活用したしくみ作りや方法を考察した。
4. がん専門病院へのNSTの提言：集学的治療への貢献を目指してチーム医療で取り組む (査読付)	共	2008年05月	日本病態栄養学会誌, 11(4):365-375, 2008	福田也寸子, 井上奈美, 竹山公美子, 並川あい, 奥村友香, 笹隈富治子, 森川圭子, 鳥越綾子, 吉岡知美, 青木厚子, 下辻恒久, 中 紀文, 富田晃司, 中島 弘, 山崎知行, 矢野雅彦 当院NSTは2004年5月に既存の糖尿病療養指導環境を母体に稼働した。次にNST運営部会を設置し、消化器外科医が代表のチームを編成し、消化器外科と耳鼻咽喉科病棟を運用病棟にして初期活動を行った。2005年度に院内栄養管理体制を構築し全科型で活動した。食道がん手術後介入症例では体重減少が有意に少ない等の成果を得た。高度専門病院でのNST組織化は横断的業務の優先度を精査した段階的な整備が推奨される。
5. メタボリックシンドロームを有する糖尿病患者における循環器疾患対策を視野に入れた食事療法の考え方への提言 (査読付)	共	2008年05月	日本病態栄養学会誌, 11(4):357-364, 2008	福田也寸子, 竹山公美子, 井上奈美, 中村幸子, 笹隈富治子, 富田晃司, 中島 弘, 山崎知行, 飯石浩康, 淡田修久 循環器疾患並びに糖尿病に係る療養指導教室へ参加した患者の冠動脈硬化病変の既往と危険因子保有数の関係を検討した。冠動脈硬化病変は肥満や高脂血症、高血圧などの危険因子保有数の多い患者及びメタボリックシンドロームを有する糖尿病患者に有意に多発する傾向があった。メタボリックシンドロームを有する糖尿病患者の食後血糖上昇の検討では蛋白質と脂質の量比に配慮した栄養組成の重要性が示唆された。
6. 高齢患者の体験実食型糖尿病教室参加がもたらす効果について (査読付)	共	2004年5月	日本病態栄養学会誌, 7(2):135-142, 2004	福田也寸子, 竹内充代, 中島 弘 当院体験実食型糖尿病教室参加の2型糖尿病患者対象。参加と糖尿病食の栄養組成がもたらす糖代謝改善効果について検証。参加による改善効果は65歳以上の複数回参加群でHbA1c値が有意に低下した。糖代謝改善効果は食品交換表配分内で蛋白・アルギニン量に差をつけた2種のテストミールを調製し健常人の食後インスリン分泌・糖尿病食摂取前後の血糖上昇で評価したところ食事療法治療群で効果がみられた。この反応の他治療群との違いは膵インスリン分泌予備能の差と考えられた。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 上手に減塩！賢く脂質コントロール！食事療法は楽しく美味しく！	単	2016年03月07日	第315回 (公社) 大阪ハートクラブ市民健康講座	我々が普段食へ慣れている和食は、日本の食文化として伝承されてきた食事である。米を主食に、山海の自然の食材である魚介類や大豆製品、野菜、海藻、種実、キノコが豊富に取り合されており、比較的低カロリー・低脂肪である。この和食を基本に、食塩を上手に減らし、脂質を賢くコントロールするこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 食事療法は楽しく美味しく一糖尿病だからできる食への気づかい	共	2015年11月15日	世界糖尿病デーイン兵庫	とで、降圧や、脂質異常症の合併を防ぐ効果が期待できると考えられる。さらに、「正しい食べたか」を実践し、外食する場合は、「害食」とならないように気をつけることで、食事療法が楽しく美味しく継続できると考える。
3. 糖尿病食は健康食！～糖尿病だからできる食への気づかい～	共	2015年09月08日	第69回 成人病公開講座	兵庫県世界糖尿病デー実行委員会（兵庫県糖尿病協会内）主催の講演会「糖尿病、あなたは大丈夫ですかー今日から始める糖尿病対策ー」で企画された3部構成（病態：医師担当、運動療法：理学療法士担当、食事療法：管理栄養士担当）の管理栄養士が担当する栄養食事療法の話を、大学での研究成果と糖尿病療養指導経験を踏まえて講演した。本講演会は世界糖尿病デーに合わせて開催されたものである。
4. 2015クッキングセミナーin西宮	単	2015年02月01日	一般社団法人全国腎臓病協会・NPO法人兵庫県腎友会・バイエル薬品共催	維持血液透析患者約60名を対象に、透析食の栄養食事指導と、2012年度「バイエル・レシピコンテスト」（主催：バイエル薬品株式会社）でグランプリを獲得した献立5点を調理指導した。
5. 成人病公開講座 合同研修会	共	2014年09月14日	（公益財団法人）大阪成人病予防協会、（株）コミュニティセンター共催 <第一部講演会>「これからの健康問題について」講師 木山昌彦（大阪がん循環器予防センター副所長兼循環器予防検診部長）、<第二部講演会>「成人病予防のお食事～生活習慣病を寄せつけず、若さを保ち続けるために～」講師 福田也寸子	「生活習慣と成人病予防」をテーマにプログラムされた4演題の一つとして講演した。演者は、大阪府立成人病センターで糖尿病療養スタッフの一員として「糖尿病教室実践編」を企画し運営に携わってきた。その実績をもとに、献立の立て方や食べ方の工夫、さらには満腹感、満足感を高める工夫など、食べる喜びを再想起し、糖尿病だからできる食への気づかいについて、食を科学する立場からレクチャーした。
6. 楽しく美味しく食べて長生きできる透析食～手軽で美味しい透析食の工夫～	単	2013年8月4日	特定非営利活動法人奈良県腎友会女性患者の集い	奈良県透析患者の患者会において、透析食食事療法のポイントやリンを摂りすぎない工夫等について、透析食レシピコンテスト（製薬会社主催）での準グランプリ・グランプリ受賞経験をもとに講演した
7. 第83回日本産業衛生学会ランチョン・セミナー	単	2010年05月	第83回日本産業衛生学会	演題名「生活習慣病管理における行動変容の動機づけと支援ー病院での経験と方法を職域に活かすヒントー」で講演した。大阪府立成人病センターにおける生活習慣病管理の特色はメディカルスタッフが全員参加し特にコメディカルが前面に出て支援する点にあり患者自らの療養意欲を促しながら意識と行動の変容、生活習慣病管理の継続性を支援していく。これまでに関わった具体例、生活背景など社会的属性や性格が異なる3症例を紹介しその要点から職域での指導にも活かせるポイントを述べた。
2. 学会発表				
1. 食生活の満足度を低下させない工夫で病態管理を実践する食事療養アプローチ：メタボリックシンドロームの場合	共	2016年07月30日	高尿酸血症・メタボリックシンドロームリサーチフォーラム 第12回研究集会	【目的】MetSを有する可能性がある高齢2型糖尿病患者において食生活の満足度を低下させない環境下で、どの程度の病態介入が可能な食事療養が実践できるかについて分析する【方法】過去に糖尿病療養指導を受講した58名を対象に食事調査を実施【結果】BMIとTG（127±74mg/dL、r=0.32、p=0.0134）、及びLDL-C/HDL-C（2.1±0.8、r=0.29、p=0.0291）の間に有意な正の相関、脂質%E（29.1±5.1%、r=-0.32、p=0.0380）の間に有意な負の相関関係がみられた。【考察】BMIの増加が血清脂質管理の悪化を招く潜在性が示された【結論】血糖及び血清脂質管理のために、%Eの基準内で、低脂質食となるように配慮し、自己管理の継続を促すことが重要である
2. 食物アレルギー児を持つ母親自身の栄養素等の摂取状況とQOLに関する検討：2年後追跡調査結果からの分析	共	2016年07月16日	第33回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会	【目的】FA児の育児が母親の栄養素等の摂取状況やQOLに与える影響について2年後調査から分析する【方法】2013・2015年に食意識やQOL、食事調査に回答が得られた31名（平均40±4.6歳）を対象に両年間で比較する【結果】食意識の設問2項目/14項目に有意な低下、他の設問に差は無く、QOLは三大原因食品数が2年前と比べて変化なし又は減少したFA児の母親27名は有意に改善、増加したFA児の母親3名は悪化傾向にあった【考察】FA児の母親は時間が経過しても食に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. 高齢2型糖尿病患者における食事療養内容の現状分析：栄養組成比率からの評価	共	2016年05月21日	第59回日本糖尿病学会 年次学術集会	<p>関する関心度は高く、QOLはFA児の除去食品数並びに除去食対応に係る生活に影響を受けていることが示唆された</p> <p>【目的】 高齢2型糖尿病患者の食事内容の現状を再評価し高齢者療養指導に求められる要点を明確にする 【方法】 大阪府立成人病センター通院中の2型糖尿病患者66名（69.7±7.9歳）を対象に栄養素等摂取状況と血液検査値の関係性を検討した【結果】 栄養組成比率は治療GLで示される基準値内であり、炭水化物量とたんぱく質・脂質・アルコール量に有意な負の相関がみられ（全てp<0.01）、副食やアルコール量の摂取増は炭水化物を減じる形で調整されていた。 【考察】 血糖管理不良例はなかったことから年齢・罹病期間等を勘案して指示単位・栄養組成比率内で、どの程度の自由度の食品選択が可能かを指導することが要点である。</p>
4. 病学連携で取り組む食物アレルギー教室の試み	共	2015年06月21日	第32回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会 一般演題	アレルギー専門病院と管理栄養士養成大学が連携して食物アレルギー（FA）教室を開催している。FA教室は年6回、13時30分～16時で開講し、除去（代替）食の調理実習と試食会、医師他医療職を交えた座談会、大学側の管理栄養士らが担当する食育等のスケジュールで行っている。食育では毎回保護者の興味をひく体験型の媒体を活用して保護者の食育力の向上を目指している。
5. 食物アレルギー児を持つ母親自身の栄養素等の摂取状況とQOLに関する検討	共	2015年06月20日	第32回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会 ミニシンポジウム	食物アレルギー児を持つ母親55名（FA群）と食物アレルギーを持たない児を持つ母親47名（N群）の間で栄養素等摂取状況とQOLに関する比較を行った。両群間で栄養素等摂取状況に差はなかったが、FA群内で横断的に分析したところ児が卵・乳・小麦の三大原因食品を複合して有する場合、その母親のBMIが低く、代替食の使用が多い等調理に手間をかけている母親ほどそのQOLは低かった。母親の心的負担を軽減させ除去食療法を行う上でも児の食育を支援する必要性が示唆された。
6. 食物アレルギー児における身体発育ならびに栄養素摂取状況の検討<学会長賞受賞>	共	2015年01月	第18回日本病態栄養学会年次学術総会	福田也寸子、高木絢加、西田京子、高岡有理、亀田誠 アレルギー専門病院小児科に通院する3～12歳の食物アレルギーをもつ児101名（FA群、7.4±2.4歳）と食物アレルギーをもたない児47名（N群、7.2±2.6歳）を対象に、痩せ・肥満とエネルギー充足率（以下E充足率）の関係を検討したところ、FA群では定型発育が確認されたが、除去期間・年齢とE充足率の間には、FA・E充足率 100%未満群において負の相関がみられ（ $r=-0.57$, $p<0.01$ ）、FA群の痩せ3名（9.0±2.0歳）は代替食未使用であったことより、代替食の成否が関与している可能性が示された。
7. 糖尿病患者の食習慣改善に長期介入する場合の栄養支援の工夫への取り組み：第3報	共	2013年11月23日	第50回日本糖尿病学会 近畿地方会	福田也寸子他8名：2型糖尿病患者の食生活の改善には長期に亘って反復・継続して実施する強化療養指導は有効である。また6ヵ月後まで体重減少を維持できた患者では以後も継続して臨床データが改善することが示された。特に今回好ましい体重変化を与える因子として嗜好品摂取指導が関与し得ることが示唆された。従って初期の段階で食習慣の偏りを評価・診断しこれを療養指導に役立てるとともに嗜好品への配慮は常に必要であることが判明した
8. 栄養指導システム「EBNmate」によるライフスタイル解析の基礎的検討2	共	2011年10月	第33回日本臨床栄養学会総会	福田也寸子、山下洋司、中本博幸、中島 弘、富田晃司、山崎知行 詳細な食事記録情報提供の協力が得られた2型糖尿病患者14名における食習慣の行動変容を栄養指導システム「EBNmate」を用いて、ライフスタイル解析項目の数値の変化として評価した
9. 糖尿病とつきあう一よりよい療養を目指して一	単	2011年06月	第52回成人病公開講座	糖尿病の食事療法について、インスリンが発見されるまでの食事療法と現在の食事療法の概要を説明し、これからの食事療法の提言を講演した
10. 術後の血糖管理にカーボカウント法を部分適用した膵癌合併糖尿病患者の一例	共	2010年11月	第47回日本糖尿病学会 近畿地方会	福田也寸子、向井美紀、並川あい、富田晃司、栗原宏子、中島 弘、山崎知行 膵癌術後糖尿病患者の食事管理の補助にカーボカウント法（CC）を導入した72歳男性の症例報告。術後の体重減少に対して患者自身の自発的意思を取り入れ1日3回の食事に数回の補食を追加し補食分の血糖管理にCCを導入した。CC導入後は補食に甘味嗜好品を安心して摂るようになり従前の我慢というストレスが軽減され血糖管理への意欲が維持された。CCの部分的導入が患者QOL及び満足度の向上に寄与していることが示された
11. 糖尿病患者の食生活習慣改善に長期介入する場合の栄養指導資料の工夫への取り組み：第2報（一般）	共	2009年11月	第46回日本糖尿病学会 近畿地方会	並川あい、福田也寸子、富田晃司、栗原宏子、中島 弘、山崎知行 糖尿病患者の血管合併症予防目的で生活習慣の改善に取り組む強化療養指導の成果の検証。強化療養指

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
12. 食事療法の規律と寛容：糖尿病食の献立選択性導入による患者QOLの向上と治療効果の検討（一般）	共	2009年11月	第46回日本糖尿病学会近畿地方会	<p>導3ヶ月後の報告に続き、6ヵ月後の血糖管理指標や身体計測値、患者意思（VASスケール質問）を調べた。結果は強化群の方が非強化群よりも、HbA1c値・体重減少率は有意に減少し、食事療法に対する意識は有意に高まった。継続的強化療養指導は生活習慣改善への持続的行動変容とそれに基づく治療効果の向上に貢献している。</p> <p>福田也寸子、並川あい、富田晃司、中島 弘、山崎知行 糖尿病食に選択性の特別食を提供した場合の患者満足度と治療効果の検討。昨年度入院食にバリエーションを持たせた特別糖尿病食を、選択した患者に対し満足度、療養中のHbA1c値を通常糖尿病食摂取の患者群と比べた。選択率は常食患者よりも有意に高く、満足度も同程度以上、療養中HbA1c値は通常糖尿病食摂取患者群よりも有意に改善。選択性糖尿病食の効果は患者QOLの向上に加え、治療効果改善への期待が示唆された。</p>
13. 体験実食型糖尿病教室への継続参加が及ぼす長期効果の検証（ポスター）	共	2009年05月	第52回日本糖尿病学会年次学術集会	<p>福田也寸子、長谷川恭一、富田晃司、中島 弘、山崎知行 基礎的な糖尿病療養知識を習得後の患者に体験実食型の糖尿病教室実践編を提供している。参加頻度別に長期効果をみる。5年後のHbA1c値は、2001年以降5年間に8回以上参加した8名・頻回群の方が7回以下参加の12名・非頻回群よりも有意に低かった。継続参加は長期血糖管理に効果があった。これは体験型学習の反復が自己管理や療養意欲の向上につながり患者自身の療養生活の形成に役立った結果である事が示唆された。</p>
14. がん患者の傍にいる管理栄養士像を目指して：NSTを発展させたがんケア栄養サポートの考え方について（シンポジウム）	共	2009年01月	第12回日本病態栄養学会年次学術集会	<p>福田也寸子、青木厚子、富田晃司、中島 弘、山崎知行、矢野雅彦 管理栄養士が担う癌ケア栄養サポートのあり方をNST活動の成果をもとに提案する。「放射線化学療法食等の改善」、「嚥下訓練食の標準化」、「NSTフーズの開発」、「選択性特別食の保険外での提供」等は、管理栄養士が患者に近いところに存在して多職種とのチーム協働作業の過程で得てきたものであり、癌患者との対話を通じた栄養支援の中で一緒に癌と向き合っている自分を見出す事ができれば、医療従事者としての自覚も高まる。</p>
15. 体験実食型糖尿病教室への継続参加が及ぼす短期長期効果の検証（一般）	共	2008年11月	第45回日本糖尿病学会近畿地方会	<p>福田也寸子、並川あい、笹隈富治子、中村幸子、長谷川恭一、富田晃司、中島 弘、山崎知行 糖尿病教室基礎編（以下基礎編）と基礎編修了者を対象とした糖尿病教室実践編（以下実践編）への参加効果を3・6ヵ月後、3年後のHbA1c値で検討したところ、3・6ヵ月後値は基礎編のみ参加群よりも実践編にも参加した群の方が有意に低く、3年後値は実践編へ継続参加している患者群の方が有意に低かった。実践編への継続参加は長期血糖管理に効果があり、患者自身の療養意欲の向上につながる可能性が示された。</p>
16. 低カロリースポーツ飲料の摂取が血糖値に与える影響（一般）	共	2008年11月	第45回日本糖尿病学会近畿地方会	<p>並川あい、福田也寸子、宮道比佐子、井戸田 篤、長谷川恭一、富田晃司、中島 弘、山崎知行 糖尿病患者において、低カロリースポーツ飲料A（0.19kcal/ml）及びB（0kcal/ml）が、どの程度血糖値やIRI値に影響を与えるかを検討するために先ず健康対象者5名で調査する。A飲料摂取後の血糖値及びIRI値は摂取前より有意に上昇したが、B飲料摂取前後では両検査値に差はなかった。スポーツ飲料に表記された低カロリーの標示をどう受容するかについて療養指導時に注意が必要と考えられた。</p>
17. がん専門病院におけるNST活動（第一報）（一般）	共	2008年01月	第11回日本病態栄養学会年次学術集会	<p>福田也寸子、並川あい、奥村友香、笹隈富治子、吉岡知美、青木厚子、下辻恒久、富田晃司、中島 弘、山崎知行、矢野雅彦 治療後がん患者の健康寿命延長やQOL改善に栄養支援は重要である。当院のNST活動が実稼働するまでの経緯について報告する。準備期：2003年度の院内将来構想委員会で発起後、2004年度に準備委員会が発足。稼働初期：2005年度に運営部会を設置、運用病棟で始動、マニュアルを作成した。実動期：2006年度より栄養管理計画書記入時に栄養問題が抽出されるよう工夫し、院内栄養管理体制の下、全科型で稼働した。</p>
18. 糖尿病患者の食生活習慣改善に長期介入する場合の栄養指導資料の工夫への取り組み：第1報（一般）	共	2007年11月	第44回日本糖尿病学会近畿地方会	<p>福田也寸子、並川あい、竹山公美子、井上奈美、奥村友香、長谷川恭一、富田晃司、山崎知行 担癌糖尿病患者の療養支援をチーム医療で行う当院で、血管合併症予防のために長期介入する患者への指導用資料を糖尿病教室実践編（実践編）での成果を基に考案。脂質・コレステロール・塩分摂取量厳</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
19. チーム医療でがんにのぞむNST活動（一般）	共	2007年09月	第1回関西がんチーム医療研究会	守のために摂取頻度や内容等を具体的に示したほか、自己管理意欲の継続のために自己点検表等を作成。6ヵ月後のHbA1c値の検証で療養意欲の継続が確認できた。行動変容を促す指導資料作成に実践編での経験の活用は有効であった。 福田也寸子, 並川あい, 奥村友香, 笹隈富治子, 森川圭子, 鳥越綾子, 吉岡知美, 青木厚子, 下辻恒久, 富田晃司, 山崎知行, 矢野雅彦, 飯石浩康 当院の特徴は集学的治療に伴う免疫力の低下から下痢や発熱, 食事摂取不能, 頭頸部・食道癌の術後で嚥下障害を呈する例が多い。NSTは栄養管理計画書を栄養スクリーニングシートとして機能させ, 褥瘡・NSTリンクナース併任制の構築と併せた院内栄養管理体制を敷き活動。がん専門病院において多職種協働で行うNST活動が稼働し, アウトカムを導くにはNSTの理念が各スタッフに理解され, 部門を越えた協力体制が必要である。
20. がん診療支援専門型NST活動における栄養管理部門の役割と食事療養支援からの工夫の実際（主題）	共	2007年09月	第17回近畿輸液・栄養研究会	福田也寸子, 並川あい, 奥村友香, 笹隈富治子, 森川圭子, 吉岡知美, 鳥越綾子, 青木厚子, 下辻恒久, 東野晃治, 高地 耕, 井岡達也, 富田晃司, 中紀文, 山崎知行, 矢野雅彦 癌の集学的治療を行う当院では, 手術・化学療法・放射線等の治療に伴う栄養問題が生じる例が多く, 院内栄養管理網を構築しNSTが稼働している。栄養管理室はNST介入必要症例の抽出を容易にするよう入院時栄養管理計画書の様式を検討し, 事務局を担当。食事療養支援では, 既製の栄養補助食品と組み合わせ独自「NSTフーズ」を調製して提供。多様なニーズに対応する為, 易経口摂取や摂取量向上のための工夫が課題である。
21. がん治療中糖尿病患者の歯の健康が血糖管理や栄養状態に及ぼす影響について（ショート口演とポスター）	共	2006年11月	第43回日本糖尿病学会近畿地方会	井上奈美, 福田也寸子, 竹山公美子, 中村幸子, 山崎知行, 中島 弘 歯の健康状態が血糖管理や全身の栄養状態に与える影響について, がん専門病院の当院へ入院する患者を対象に実態調査した。糖尿病合併群は非合併群よりも, 義歯・欠損歯・う歯等を有する程度が有意に高かった。糖尿病患者では血糖の上昇に伴い, 歯の健康が悪化し, 義歯・欠損歯・う歯に至っている可能性が考えられ, さらに癌治療中の糖尿病患者においては歯の健康の良否が血糖管理や全身状態へ及ぼす影響が大きいと考えられた。
22. メタボリックシンドロームに対する療養指導に糖尿病療養支援チームの果たし得る役割（ショート口演とポスター）	共	2006年11月	第43回日本糖尿病学会近畿地方会	福田也寸子, 竹山公美子, 井上奈美, 淡田修久, 長谷川恭一, 山崎知行, 中島 弘 癌専門病院の当院では担癌糖尿病患者に合併する糖尿病の療養支援にボーダレスなチーム医療を構築実践し, そこから生まれたNST活動について昨年のシンポジウムで報告。これらの実績から臨床栄養活動の発展に歯の健康やカーボカウント（CC）の導入効果, メタボリックシンドローム（MetS）患者の栄養管理について検討。インスリン療法者ではCCの活用が有効, MetS例では脂質代謝の問題が主に関係することが示された。
23. がん治療中の糖尿病患者における食事療養組成に基づく血糖管理方法の検討（口演）	共	2006年11月	第43回日本糖尿病学会近畿地方会	竹山公美子, 福田也寸子, 井上奈美, 松本 都, 金星正美, 笹隈富治子, 山崎知行, 中島 弘 食事療養組成に基づいた食後血糖値の予測方法について検討。体験実食型糖尿病教室（実践編）参加の食事療法のみ患者を対象に実践編で昼食として提供した糖尿病食（お弁当）をカーボカウント（CC）の考え方を利用して食後2時間予測血糖値とお弁当摂取後1時間血糖値との関係をみたところ, 有意な正の相関が認められた。CCを用いて予測した食後血糖は, 臨床的に有効な値を示し糖尿病治療において参照できるものと考えられた。
24. NSTにおけるコメディカルの役割ー臨床検査技師の役割（主題）	共	2006年09月	第16回近畿輸液・栄養研究会	笹隈富治子, 福田也寸子, 竹山公美子, 重浦万理, 森川圭子, 吉岡知美, 青木厚子, 松田郁世, 井戸田 篤, 永井 博, 松永 隆, 山崎知行, 矢野雅彦, 中島 弘 当院での全科にわたるNST活動は2005年度から開始。診療側に栄養支援の意義が浸透していない当初の段階では介入依頼も少なく, 臨床検査技師が日常業務として扱う血清Alb値等のデータを元に栄養問題症例を抽出した。栄養管理計画書を栄養評価のスクリーニングシートに援用することで活動の拡大が期待される。今後は検査データの抽出業務に留まらず, 情報発信など, チームの一員としての積極的な役割を果たす必要がある。
25. がん専門病院での栄養管理計画実施における工夫と問題点（主題）	共	2006年09月	第16回近畿輸液・栄養研究会	福田也寸子, 竹山公美子, 笹隈富治子, 重浦万理, 森川圭子, 吉岡知美, 青木厚子, 松田郁世, 山崎知行, 矢野雅彦, 中島 弘, 飯石浩康, 淡田修久, 石川 治

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
26. がん専門病院のNST立ち上げに糖尿病療養指導士が果たす役割（シンポジウム）	共	2005年11月	第42回日本糖尿病学会近畿地方会	臨床栄養管理網として策定した栄養管理計画書の工夫と問題点について報告。癌診療を支援する機能を持たせるため、導入や様式については幹部会議等で審議された。本計画書記入時にNST介入の必要性等の問題点が容易に抽出されるよう工夫し、項目別に該当チェックボックスに印を入れる方式を採用し全入院患者を対象とした。今後はNST介入依頼へつなげるモチベーションの継続を図り、NST活動に貢献する運用確立が必要。
27. 担がん糖尿病患者における食後2時間血糖測定の意義（一般）	共	2005年11月	第42回日本糖尿病学会近畿地方会	福田也寸子, 竹内充代, 北島恵子, 笹隈富治子, 松本都, 金星正美, 白石由美, 太田直美, 山崎知行, 中島 弘 CDEが中心となる糖尿病療養支援（閉じた輪のシステム）体制をNST立ち上げに活用。蓄積したノウハウをプロトコル化し、NST特有の問題解決手法を加味して実例に当る。これまでの実績から異職種間の相互補完機能と問題点の共通認識があり全人的支援体制が得られた。準備期間を経て当院NSTは実働化した。糖尿病療養指導支援をボーダレスなチーム医療として実践する環境があれば組織横断的なNST構築に貢献することが示された。
28. 外来糖尿病看護相談・第2報：思考類型が自己管理効果に及ぼす影響（一般）	共	2005年11月	第42回日本糖尿病学会近畿地方会	笹隈富治子, 宮道比佐子, 大西正信, 永井 博, 福田也寸子, 山崎知行, 中島 弘 食後血糖反応が血糖管理指標に有用であるかの検討。非インスリン療法の担がん糖尿病患者のHbA1c値と空腹時・食後2時間血糖値（FPG, PPG）を測定し、血糖和ΣPG（FPG+PPG）を求めた。1か月後のHbA1c値と血糖指標の相関はΣPG, FPG, PPGの順に良好。担がん患者では度々赤血球寿命の短縮が認められHbA1c値の解釈に注意が必要であるが、食後血糖反応、特にΣPGは血糖管理状態の判定に有用。
29. メタボリックシンドロームがみられる糖尿病患者への療養指導上の課題に対する一考察（一般）	共	2005年11月	第42回日本糖尿病学会近畿地方会	松本 都, 中村幸子, 早崎美知, 大谷良子, 田口賀子, 前田恵美子, 福田也寸子, 長谷川恭一, 山崎知行, 中島 弘 当院で実施中の外来看護相談の効果と指導に及ぼす思考の影響を明らかにするため看護相談を行った患者を対象としてHbA1c値が改善（7%未満又は0.5%以上改善した場合）、悪化、変化なし群に群別し思考の影響を分析した。結果、改善群ではポジティブ思考の傾向があり、悪化・変化なし群では非機能的な自動思考の傾向がみられた。患者の思考パターンは自己管理効果に影響し、それは行動変容を介したものだと思われる。
30. 循環器疾患病棟における耐糖能異常がみられる患者への栄養サポート効果（一般）	共	2005年11月	第42回日本糖尿病学会近畿地方会	竹山公美子, 福田也寸子, 山本千恵, 竹内充代, 山崎知行, 中島 弘 メタボリックシンドローム（MetS）を有する患者の糖代謝を中心として病像について検討。当院糖尿病教室実践編参加患者を対象にMetS診断基準で二群化後、提供した糖尿病食（検査食）摂取前後の血糖上昇の変化を分析。結果、MetS有無群間には肥満（内臓脂肪蓄積）・インスリン抵抗性の問題が関与するため、MetS（+）例では血糖制御だけでなく動脈硬化疾患発生子防も視野に入れた栄養組成を加味すべきことが示された。
31. 栄養部門における情報提供と安全管理のためのボーダレス化—信頼される栄養管理室の構築を目指して—（主題）	共	2005年10月	第55回日本病院学会	山本千恵, 福田也寸子, 竹山公美子, 竹内充代, 山崎知行, 淡田修久, 中島 弘 当院で糖尿病食オーダーが増加している現状を循環器疾患病棟で実施中の栄養教室の意義とともに、この教室への参加後、継続指導を行ったメタボリックシンドロームを有する症例（MetS（+））で検証。糖尿病療養のノウハウを盛り込んだ内容で指導した結果、冠動脈の再狭窄や再イベントが抑制できた。MetS（+）の循環器疾患患者の再発予防には生活習慣改善の介入が重要で、療養指導士のハイリスク症例へのアプローチは意義がある。
32. がん専門病院におけるNSTの現状と問題点（主題）	共	2005年10月	第15回近畿輪液・栄養研究会	福田也寸子, 竹内充代, 竹山公美子, 山本千恵, 中島 弘, 淡田修久, 石川 治, 竜田正晴, 今岡真義 当院を例に栄養部門が果たす安全管理面での役割を報告。通常の給食業務に加えて臨床栄養活動がボーダレスな環境で実施。食事療養委員会（委員長は診療局長）が各部門から構成。インシデント対策等は栄養担当医の助言指導が適時適切に得られている。衛生管理では細菌学的汚染の有無をルーチンの拭き取り検査で確認。業務委託を基本に少数の常勤職員で構成された部門が機能を発揮するにはオープンな組織として有機総合的な管理が重要。
32. がん専門病院におけるNSTの現状と問題点（主題）	共	2005年10月	第15回近畿輪液・栄養研究会	福田也寸子, 矢野雅彦, 青木厚子, 松本 都, 重浦万理, 竹内充代, 笹隈富治子, 北島恵子, 山崎知行, 淡田修久, 石川 治, 中島 弘 癌専門病院におけるNST立ち上げまでの活動から現状

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
				と問題点を探る. 2003年度院内将来構想委員会でのNST立ち上げ決定後, 準備委員会発足, 仮チーム組織化し報告会を通じて院内への啓蒙活動を実施. 結果, 消化器外科(食道癌), 耳鼻咽喉科(頭頸部癌)にニーズが高い事, 医療者間にNSTに対して温度差がある事が確認できた. 準備委員会活動はNSTの共通認識が薄かった癌専門病院において機運を高める事に役立った.
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 雑誌「Nutrition Care」編集同人への参画	共	2013年12月	株式会社メディカ出版 Nutrition Care誌	臨床栄養の現場では検査や観察による栄養アセスメントの方法論がエビデンスとともに確立しつつあり、このアセスメントをどのように栄養ケアに生かして個々の患者に対応していくかなど様々な患者へのアプローチの試行錯誤やエビデンスの蓄積が行われている。本誌は臨床の栄養士向けの専門誌であり、これらの試みを共有することは本学における教育研究に有用であるので編集同人への参画依頼を受諾し参画することとした。
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2013年10月6日	NPO法人兵庫県腎友会第13回大会in西宮における学生とのボランティア活動
2. 2010年04月から2012年11月現在	日本栄養改善学会
3. 2010年10月から2012年11月現在	日本臨床栄養学会
4. 2014年5月から開始し継続して実施している	ドナルド・マクドナルド・ハウスにおけるミールサービスのボランティア活動にゼミ学生とともに参加
5. 2008年04月から2012年11月現在	日本糖尿病学会
6. 2001年04月から2012年11月現在	日本病態栄養学会 評議員
7. 2012年04月から2012年11月現在	日本肥満学会